慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	群の概觀
Sub Title	
Author	衣斐, 久雄(Ibi, Hisao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1933
Jtitle	哲學 No.10 (1933. 2) ,p.103- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000010-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

群の概觀

衣斐久雄

一

群は個人の集合的なる生活態である。如何なる個人と雖も、一切の群より遊離して生活を營むものはない。個人の生活は結局、種々なる群の成員としての種々なる活動の合成である。群の概念はスモウルの云へる如く、個人の結合狀態を表はす最も普遍的にして、偏色なきものである。(註一)一つの家族、一團の群衆、一個の職業組合、一個の民族等、みなそれぞれ個人の集合態として一個の群と見做すことが出來る。個人は常に群の中に生活し、その運命を、殆んど群のそれと共にする。或る群に於ては、個人はその中に生れ、その中に成長し、その中に死ぬ。終生その關係を絶つことがない。或る群に於ては、個人は恣まゝにその中に入りその中で行

動し、また自由にそれより離脱する。その期間の長短は種々雜多である。或る群に於ては、個人はその中に入り、その中で活動し、やがてそれより離脱することを、餘儀なくせられる。その期間の長短もまた雜多である。群の內部に於ける成員の個人的相互關係、集團的全體關係、及びその基礎の上に立つ、群の組織、機能等もまた雜多である。こゝにその基本的なるもの、類型的なるものに就て觀察の概要を記する。

集合的なる生活態は、植物、動物に於ても認められる。植物群は一定の氣候風土に於て、孤立するよりも群生するを、有利とするやうな生活適應性の一致が、個々の植物間に具有される場合に成立する。このやうな適應性の一致が、一層複雜な形式に表現せられて、個體間に於ける、生活機能の遺傳的分化となつたのが、動物群の特徵である。遺傳的な機能分化の結果として行はれる動物群の分業的活動は、普通の條件の下では、個體の本能に依つて、合目的風に誤りなく營まれる。高等なる動物群の或るものに於ては、はやくも、社會統制の根元的形式と認められる、個體の任意行動に基く運動の一致性が表現される。所謂先に立つものと後に從ふもの

との明白なる分化である。社會的なる群、卽ち人間の集合態に於ても、動物的なる身體上の遺傳分化の存することは勿論である。然しそれは他の動物とは比較にならない複雜な、形相を各個人の上に具體化する。かゝる個體的なる遺傳所產の外に、人の群は個人相互の間に、廣義の生活手段を共有する。卽ち技術及び用具を中心とする、廣義の社會傳承を共有する。このやうな傳承は歷史的にも、過去と未來を共に測り難い程の、悠久なる發展性を有する。その限界、その內容は、共に廣大にして複雜極まりないものであり、人類の文化の客觀的徵件となるものである。

動物群に於ては、無論このやうな素晴らしい、共同生活上の傳承は存在しない。然し或る特殊の生活技巧等のやうな、傳承らしきものが或る種の群に固有するのは事實である。それは恐らく、專ら本能に依つて繰り返される模倣運動の結果、固定せられた生活形式であつて、その性質は個別的であり、無機的であり、發展性の無いものと解せられる。人の群に於ては、個人の生活適應性は、個體上の遺傳的進化として殘される一方に、群の全體的傳承に依つて規定される。言ひ換へれば、傳承の一層實體的なる、一層持續的なる性質に依つて、個性の環境に對する關係の安定

が確保せられる。勿論これは原則的なる考察に於てである。個々の場合に就て、兩者の關係が此の反對であることは少くない。群の傳承は本質上、群の成員から遊離して存在するものではなく、必ずその負擔者或は造營者等としての個人の活動に依存する。文化は文化の運轉者と無關係に發展する筈はない。或る群の成員の全部的なる死滅は、常にその群の社會傳承乃至文化の完全な廢絕を意味する。然し傳承それ自體は、個人の意志如何に拘はらず、群の維持的勢力の全面的手段として、積極的には群の强化のために、消極的には群の崩壞防止のために、成員たる各個人の思想及び行爲の上に、强大な整形的影響を及ぼす。その拘束力の强さは、個人の遺傳分化の如きの比ではない。廣義の意味に於ける群の傳承の拘束性と、群の成員の活動に於ける自由性との、調和如何は、直ちに群の全體生活の健全性に關する問題となる。個人は常に創造的な生命力の要求に依つて、自己の活動に加へられる束縛を、できるだけ斥けやうとする傾向を有する。この傾向は、他の個人及び個人の集合に對しては、できるだけ多くの拘束を欲求する傾向に轉化する。この兩面の傾向は綜合せられて群の共同生活に於て、個人の自律的傾向となり、群の

行動自制となる。

(註一) Small : General Sociology 495 p.

二

個別的なる行動の綜合的なる自制作用は、群の社會性の本質をなすものであると考へる時、種々なる獸類の群、家畜の群等に於ても、最單純なる社會群の型が認められることは、既に知る所であるが、その群生活の基調をなすものは、當然一元的にすべての群に共通なる、各個物の群居本能である。(註一) しかしここに對象とする、充分なる意味に於ての社會群卽はち人の群に於ては本能的現象と、その上に建築せられたる技巧的現象との、重複せる特質を認めなければならない。この特質に依つてのみ所謂人格分化も、(註二) それに關聯する、個人の雜多群に於いて、同時的成員たり得る現象も、說明せられる。

いま群の生活內容の概觀的考察に入るに先だつて、少しく外面的觀察を試みて

見たい。群が個人の複數的存在の、或る特殊の形式である以上群の大きさの問題は、結局その成員の人數、卽はち人口量の問題である。人口の多少は群の形式、組織に、その增減は群の運命に至大の關係を有する。群人口の最少限は勿論二人である。その最大限は全人類の中、結合を意識し得る人數の可能量と推定される。群の大さに關して次に考察されるのは、群成員の分布區域の大小卽ち、活動範圍の地域的廣狹の問題である。群には領土の國家に於けるが如く、土地が群の構成要素たるものもあり、また或る種の奉仕團體、社交的倶樂部等の如く、必ずしも土地を要素としないものもある。そのいづれにしても、成員の個別的並びに全體的活動の範圍を、地域的側面から觀ることは可能である。そしてこのやうな地域的條件は、概ね群そのものゝ、時には其の勢力の、大小に關聯して考察せられる。家族、近隣者の群、地方的小社會等の如く、その成立の過程に於て、自然的、發生的な要素の多いものほど、成員の分布區域は比較的に狹少である。それは政治經濟的結社、奉仕的、宗教的乃至教育的諸團體の或るものなどのやうに、理想的、構成的要素の强いものほど、比較的に廣大である。第三に考察されるのは群の交通量の大小の問題である。

群の成員の相互的及び全體的交通の多少は、成員の人口及び地域的條件と、群の共有財たる社會傳承の大小との相關現象である。云ひ換へれば群の成員密度と、群の文化濃度との交叉現象である。概して人口の密度高く、文化の內容豐富なる群ほど、成員の全體的交通量は大であり、相互的交通量は小である。逆に人口の密度低く、傳承の質量稀少なるものほど、成員各個人の相互的交通量は大であり、全體的交通量は小である。此の事實は、群成員の結合內容の發展に至大の關係を有する。

次に群の時間的關係に就て一瞥したい。さきに述べたる如く、群の地域的限界は構成的、理想的要素の强き群に於て廣大であるが、これは、かゝる群の文化內容の高度を、表示する一つの標識とも考へられる。文化の發達に基く交通量の增大は、構成的群の地域的擴大を益ゝ容易ならしめる。しかし交通手段其他文化一般の發達が、群の人口量、地域量等の擴大に寄與するに比例して、群の時間的大さ、又は群としての團結の持續性をも、增大せしめるか否かは問題である。群の生命は元來、その成立の基本的性質に依つて豫め長短の差別、凡そ一定せるが如く見える。しかしそれは比較的の長短であり、決して斷定的なる長さを示すものではない。例

へば家族の永續性は、その上位的血族群としての民族の永續性よりも短少である、又は一つの經濟團體の存續期間は、その根柢に横つて、その活動を保證する政治形態群としての國家よりも、概して短少である、等と云ひ得るのみである。若し其の長短の比較に、決定的な差別の認められる場合があるとすれば、それは自然的、發生要素を主體として成立する生成的群と、かゝる群の基礎の上に建設せられる、文化的目的内容を要素とする構成的群との比較であらう。一つの民族の生命は、その民族の内面的並びに外面的支配關係の、目的類似に依つて構成せられたる國家のそれよりも、常にもつと永久的である。

ひるがへつて、交通量と群の時間性との關係を考ふるに、次の如き事實が認められる。その增減は群の成員各個の上に兩面作用を有する。即はち群全體より成員各自への關係に於ては、交通量の增大は統制手段の强化、從つて全體意識への統一作用の强化となる。成員個人より群全體への關係に於ては、交通量の增大は、個人の活動の手段及び範圍の擴大、從つて新知識、新經驗へのより自由な解放を意味する。その結果は群の比較的固定せる傳承内容、及びそれを機緣とする集團意識

に對する、成員の個人的態度に不安定なる流動性を與へ勝ちとなる。また交通量の增大は群の內部に、比較的に瞬間的なる小群を容易に、形成せしめ、また消散せしめ得る可能性を增大する。今日に於ては現實に數十萬の群衆が數時間の內に發生し、數千萬の軍隊が數日にして構成されるのである。

(註一) Park and Burgess: Intraduction to the Science of Sociology, P. 30.

(註二) G. Simmel: Philosophie des Geldes. S. 371.

三

群の外面的觀察を、その形式に從つて行ふには、種々の特殊の名稱の下に、その特徵を表示せられる多くの群の內、類型的なるものを分類的に考察するのが、便宜のやうに思はれる。群の分類を成員の素質的異同に依つて試みたる人にル・ボンがある。彼に從へばあらゆる群は同質群と異質群とに大別される。街頭群、國民議會群等は、後者の代表的なるものであり、政治的又は宗教的黨派、軍事的又は宗教的

階等群、政治的又は經濟的階級群等は前者の代表的なるものである。この分類は當然種々なる批評を免れない（註一）所謂街頭群は、その成員の結合力甚だ弱く、その團結の恒久性皆無に近い、多くの一時的群衆の代表的なるものである。即ち隊伍を組んで街頭に示威する群衆の如きは、此の部類には入らず、却つてかゝる出來事を傍觀する見物人、彌次馬等の群にその存在を認められるものである。此の種の群に於ては、成員相互の人格的認識が甚だ淺薄である。彼等は單に或る外面的な興味の類似乃至一致に依つて、地域的に一時の結合關係に置かれたものに過ぎない。會員制度等に依らない、云ひ換れば恒常的な組織を有しない集會群等も、概ねこの範疇に屬するものである。此の種の群の特徴は、次ぎの如き點にある。成員相互の人格的認識が淺い結果、比較的に各個人の共同的責任感が薄い。これに反して、興味中心の個人的意識は、比較的に強い。從つて他の統制强き群生活に於て、相對的に抑制されて、潛在意識化せる個人的恣意が、此の種の群生活に於て無意識的に解放せられる傾向がある。即ち多數者の密集的集合に依つて釀される共感作用のため、各個人の心理は興奮狀態にあり、刺激に對して情緒的に甚だ鋭敏で

ある。然るに全體的意識に依る個人の自己統制力は微弱であり、堅固なる團體的行動への訓練は皆無である。その爲に一人又は小數の指導者に依つて、この種の群は極めて容易に操縱せられ、常に簡單にして時に强大なる群衆的行動を演ずる。

此の種の群の成員は、其の素性、教育、職業、社會的地位等に於て、全たく雜然として統一なきやうに思はれる。從つてこれを異質群と呼ぶことは正當であるやうに思はれる。然し少しく立ち入つて觀察する時は、必ずしも此の名稱は全たく妥當なるものとは思はれない。街頭群は最も異質的なるものの一つであるが、それでもなほ、各個人の負擔する教養に於て、同一的文化內容が豫想せられる。まして多くの娛樂的集會等の一時群に於ては、文化的水準の同等性のほかに、經濟的條件の類似も亦明確に認められる。これは異質群のいま一つの類型たる議會群に於て更に一層明らかである。

一つの相當大なる人口量に達せる群に於ては、その活動上の必要より成員の機能的分化を生ずる。それは多くの場合直ちに其の群に包含せられる、多くの從屬的小群として組織化する。かゝる組織化は多少とも、一群內に於ける多數小群の

割據的並びに封鎖的對立の狀態の形成を意味する。その際、群の全體的統制を維持せんとする成員の意志的勢力が、集中的に表現されて、一定の組織を有するに至れば、群の全體的維持發達のみを目的とする、一種の小機能群が形成される。即ち廣義の政府及び狹義の支配階級である。合議機關等の代表者制度は、本來この過程に基礎を有する多數者の意志表示である。從つて社會の隅々から、あらゆる小群の代表者が出て、夫々の特殊的立場から全體問題を合議すると云ふ形式である。議會的集會群の異質的であると考へられる理由は大體前述の如くである。然るに現實の議會群は、いづれかと云へば殆んどすべて等質群である。僅かに異質的なるものを求めれば、その利害を代表する生產部門の相違である。この種の相違は、利害の本質的關係に何等の差別を付するものではない。議會の成員は、その主體に於て明らかに、等質的であると云はねばならない。それは簡單に云へば、すべて全體的機能を有する統制機關は、各分化群の不可避的な集合的エゴイズムに依る、爭鬪乃至競爭過程を通じて、全體的優位の獲得に成功せる、廣義の一支配階級群に獨占せられる傾向があるためである。如何なる分化群が、かゝる全體的優位の

支配的地位に立つかは、歴史的、民族的に相違する各群(國家)の文化(廣義の經濟機構)の特殊性と、密接な交互的因果關係を有する問題であるやうに思はれる。

次に等質群としての戰鬪的宗派(セクト)の成員に就て考察する。元來宗教的なるものを、その結合の契機とする群に於ては、觀念的、情緒的に成員相互の類似性は極めて多い。またその上に、禮式祭祀戒律等の統制傳承に依つて、微細な行動形式にも、外的拘束が加へられる。かくして此の種の群成員の個人的定型は、他の群成員のそれよりも、比較的に劃一されて居る。またすべて戰鬪的なる群は、他群との對抗過程より群の自意識を强化せられると共に、成員全體の緊密な集合行動を强要される。そのためには、成員各個の原則的等質化が必要であり、異分子及び能力的劣性分子排除の目的に依る、淘汰過程が繰返される。此の種の群に屢々生じ易い分裂現象は、この淘汰過程の特別な場合である。セクトの成員が思想、行動、趣味、信仰、其他一般能力に於て等質的であると考へられる理由は、大體右の過程に依つて結合せる群成員であるからである。

しかしセクトの等質性には限度がある。その成員が素質的に、本來等質である

べきことは、その群成立の前提ではない。セクトは元來自發的、開放的、併呑的な宗教群である。その目的とする所は、他の思想的、宗教的群を、信仰的乃至思想的に克服して、これを同化し、併合することに依つて、無制限に自己を擴大して行くことである。從つて絶えず異分子の混入と淘汰とを繰返さねばならぬ條件にある。政治的、其他のセクト的集團に就ても、略々同樣の觀察が得られる。宗教的信仰、國粹主義、社會主義、無政府主義等、如何なる觀念的集合運動も、その發展の或る段階に於て、セクト的形式を取ることは共通である。

セクトの成員が、出生、教育、社會的地位等の差異を有し乍ら、共通なる思想、集合目的に向つて强固に結合せられるに對して、階等群(カアスト)は廣義の職業的等質、從つて主として社會地位の同位性に依つて合成せられた群である。その成員の內的生活に於ては、想念、信仰等最奧なるものに就て、必ずしも共通的ではなく、比較的に自由である。その成員は趣味、教育、出生、地位等の類似より形成される個人的行爲習慣の、類型的同一性をその特徵とする。征服的過程を經て成立せる社會群に於て、種々なる依屬群の平衡的狀態として此の群の存在が認められる。(註二)從つ

で世界到る處の國家内に、カアスト的階層社會の存在が、認められるのであるが、特に東部歐洲及び印度に於ける、それが著しきものである。インドに於てはカアストは出生卽ち門閥に依つて定まる。一カアストの個人はその同一階等群の個人等とのみ居住し、飲食し、結婚することを可能とされる。歐羅巴に於ては單に出生のみに依らず、種々なる環境的條件、教育等も、カアスト加入の條件となる。そして唯々同一カアストの人人とのみ交際し、結婚し、食卓を共にするの風は實際的に印度のそれと全然同一である。我が國に於ても亦然り、我等はみな限定せられた、一定の封鎖圈内にのみ生活し、その範圍に於て友人を、客人を、また親類緣者を見出すのである。所謂不釣合なる結婚は印度カアストに於ては宗教的に禁止せられ、我等の社會に於ては輿論的に、習慣的に嚴しく制裁せられる。

階級群は量に於て階等群よりも大である。その群形成の基礎卽ち成員結合の紐帶は、利害關係、特に經濟的利害關係の同一性に基く權力關係の分化にある。近代國家の經濟的發展と並行して、分化して來た經濟的構成群は、多くの淘汰過程を經て、いまでは唯二つの對立的な階級群に大別されるに到つた。そして兩者共に

部分的には、超國家的組織にまで發展しつつある。

(註一) S. Sighele, Psychologie des Sectes. PP. 42.

(註二) C. A. Ellwood, Sociology in its psychological Aspects. PP. 194.

四

次に群をその形成過程より發生的に觀察して分類する方法は、多くの學者に於て共通し、且つその根據は一層確實であるやうに思はれる。如何なる群も個人の結合關係の、一定範圍內に於ける等質的總量である以上、その結合關係の根底には一定の客觀的條件が存在しなければならない。これを假に成員相互間の紐帶と名づければ、群の結成には、原則として明らかに二種類の紐帶が認められる。一は自然的、普遍的、不可避的なるものであり、他は文化的、特殊的、選擇的なるものである。自然的紐帶の主體は血緣である。而して地緣はその必然的伴侶であると考へられる。この範疇に屬する群には、家族、氏族、部族、地方種族、民族の一系列がある。こ

れ等の中、相當多數の人口を有するもの、卽ち地方種族、民族等は地緣的側面より、時に國(クニ)と呼ばれる。此の種の群に於ては、成員の結合動機は根本に於て、全く生物的本能的であり、その形成過程は生成的であり、人口的には自然增加的である。此の意味に於て、この種の群を、總括的に生成群と呼ぶことは、不可でないやうに思はれる。如何なる個人も、生成群の成員としての、個人的並びに全體的關係を、斷絕することは出來ない。勿論文化の一般的發展は、文化的紐帶に依つて結成せられる、種々なる人爲的構成的群に於ける、成員としての活動に、個人生活の重點を移行せしめ、個人の生成群に於ける結合關係の自覺を、漸次曖昧ならしめやうとする傾向がある。それにも拘はらず、生成群の存在は實質的に、その發展は原素的に確實である。反省すれば、一切の文化的社會は生成群の基礎の上に設けられた、人類の群居生活の上層建築であるに過ぎない。此の意味に於て生成群は、人類生活の基礎社會である。

文化的紐帶に依つて結成される集團は、自然的なる生成群に對して、構成群と呼ばれるものである。此の種の群に於ては、成員は文化の部分的內容を條件として

結合する。即ち構成群は、社會生活に於ける個人的活動の、特定的な目的の類似又は共通性を契機として結成せられる。生成群に於ける個人的結合關係が、全人性を帶びるに對して、構成群のそれは人格分化性である。構成群は文化內容に表れた生活活動の、種々なる分野に照應して、個人の集合的行動の統一のために形成せられるものであるから、群の協同的目的は、群形成の要素として、始めより明確に意識せられ、またその達成のための手段としての機能及び組織は、群の本質的成分となつて居る。此の點は生成群に於ける群形成過程と、根本的に相違するところで、生成群に於ては成員の主觀的側面に關する限り、本來の結合關係の契機として、目的と見做すべきものはない。いはば群の形成、維持、發展そのものが、自然に群の共同目的となつてゐるかの如く、また成員はそのために、いはば盲目的に、本能的に努力せざるを得ないかの如き關係にある。此の點を比較して考へれば、構成群はまた機能的目的群と呼ぶことも出來る。勿論、構成群といへども、その發達が或る程度に及べば、群成員の結合關係は、內的に變化を生じて、著しく人格的乃至愛着的となり、群の全體意識は當初の利益目的(廣義)のほかに、またはそれを沒却して、群の存

在維持そのものを、上位的目的と認めて、協同活動の方向を轉換する傾向がある。これは成員相互の個人的接觸に依る結合關係の內容的發展と、それに原因する利害關係の變化とに依る、必然的な結果である。此の點に關する限り、多くの構成群は、その發達と共に、次第に生成群化する傾向を有する。また逆に生成群は、その發達の或る段階に於て、必然的に成員の機能的分化を促す。その分化群が組織的形態を具へて、目的活動を始める時は、卽はち構成群の派生する時である。此の意味に於て、あらゆる生成群は、その發展過程に於て、絕えず構成群化するものと云はざるを得ない。全體的に見て、構成群は生成群の基礎の上に、その文化傳承のために形成される派生社會である。

構成群の種類は、人類文化の複雜多岐なる內容に相應して、殆んど無限に雜多である。これを概括して、政治的、經濟的、宗教的、學術的、藝術的等と分類する。而して發生的に、その孰れが最も始原的なものであるかは、容易に極め難い問題であるが、生成群のうち、最も始原的なるものとしての、家族の統制現象から推して、それは支配的、權力的の性質のものであることは想像される。原始的な家族が、一定限度ま

で人口的に膨張し、且つ生活手段に就て獨立的となれば、その家族は自意識を强調されて、必然的に閥族的(クラン)性質に變化する。同樣に民族が內的充實と外的對立等に依つて、自意識的となり、抗爭的となれば、その民族は必然的に國家的組織形態に向つて急進する。一般に群は、群意識を强化するに從つて、その形式に性質的變化を現はして來る。外的抗爭は、群の內的機能及び組織の上に、恒に强い影響を與へるものである。この意味に於て、國家は現實に征服過程を經て發展する階級社會であり、最も雄大な、最も充實した、人類の構成的大集團であるにも拘はらず、その成長の胚種は、甚だ原素的、根源的なものであると云はなければならない。

次にパアクに依つてなされた分類の、類型的名稱を揭げる。(註一)この分類の基礎は右に述べた所と大同小異であるが、その說明は、專ら群成員の結合關係に依つてゐる。

A　家族

B　言語的(人種的)群

C　地方的、鄉土的社會

一、近隣
二、農村社會
三、都市社會
D　爭鬪的群
一、ギャング
二、勞働組合
資本家團體
中產階級聯合
小作人組合
三、人種
四、宗派(セクト)
五、國家
E　順和的群
一、クラブ

二、社會的階級
職業的團體
三、カアスト
四、宗門
五、國民

右の五種類の社會群のうち、前三者ABCは基礎的な社會で、所謂一次的群である。即ち個人の主觀的結合に依つて、成員相互が內面的に、個々面識的に接觸してゐる。後二者DEは所謂二次的群で、一次群の內部に派生するものであるが、歷史的には主として、一つの一次群が他の一次群を、壓迫することに依つて出來たものである。その二次的であると見られる理由は、或る程度の量に達した群の內部に於ては、必ず多少とも爭鬪的及び順和的現象を生じて、そのために群成員の集團的分化を生ずるからである。この種の群に於ては、成員の結合は客觀的であつて、個人の態度は主として、全體的な目的意識に依つて、統一される。なほ鬪爭群の一つに人種が掲げられてゐることは、二次的性質の點より見て奇異の如く感ぜられる

が、これは勿論人種的小機能群乃至人種的大國家聯合を意味するものと思はれる。この分類が必ずしも、充分に適當且つ論理的でないことは、著者に依つて自認されてゐる。(註二) 複雜な人類の協同生活を、現實に卽して集團的に分類することは如何なる觀點よりしても、容易に徹底を期し難いのである。

(註一) Park & Burgess: Introduction to the Science of Sociology. PP. 56.

(註二) 同上

五

次に群の統制現象に就て一考する。

群は如何なる種類、性質のものであつても、必ず一つの纒つた、他と比較的に明瞭に區別のつく個人の集合體である。卽ちそれに屬する個人は、集團的に一種の特徵を有してゐる。それは群が常に成員の上に、統一的作用を有する理由ともなり、また事實上の結果でもある。群の成員は相互に結合を意識し、同時に何等かの程

度に於て、群そのものへの直接的な團結の意識を共有する。集團的な結合意識は、其の群の目的內容の性質如何に依つて、或るものに於ては顯著であり、或るものに於ては潛在的である。いづれにしても、群の個人に對する統一的傾向は甚だ强烈である。此の意味に於て、社會群(人間の集合態)は本來統一體であると考へられる。群への個人的結合意識の合成は、全體意識(群の集團意識)となつて統一され、その意志的側面に於て、共同目的への個人的活動方向を制約する。群の共同目的は大體に於て、構成群には明確であり、成員の個人的利害に關係するものが多い。生成群に於ては、初めから共同目的として規定された意識的なものはなく、成員の結合關係の中に、本質的成分として、その發展と共に自然に生長し、群の全體的利害に關するものである。即ち構成群の目的は概ね、集團生活の比較的安定した基礎の上に、個人的欲望の對象として求められる體力、權力、富、知識、趣味、品性等に關するものである。然るに生成群に於ては、もし共同目的が規定されるとすれば、それは群の對外的並びに對內的諸關係の安定であり、直接に個人生活の安全そのものに關係するものである。從つて構成群に於ける個人の行動統制は、人格分化的であり、その

原理は技巧的、規則的であるに對し、生成群のそれは、全人格的であり、その根據はいはば先天的、不文律的である。勿論實際に於て生成群はみな、機能上に構成的發達を遂げるものであるから、その純粹なる固有の統制形式なるものは、具體的に例示し難い。ここに於て、再び國家の群としての形成並びに性質を顧る必要がある。事實上、國家は人類の集合生活の內、最も完全に近い群である。家族も民族も、宗教團體も經濟團體も、すべての社會群が、國家の基礎の上に立つかの如く見え、それ等の群及び成員としての各個人の保護のためには、國家は最も强大な實力を有してゐる。またその成員卽ち國民の集團意識は、他の如何なる群のそれよりも旺盛であり、その結合內容は全く感情的である。また國民團結の客觀的條件と見るべき、國土の紐帶は絕大な吸引力を有するものである。個人の所有的欲望、家族、部族等の鄕土的愛着は、國民的生活過程の間に發展集化せられ、遂に國家の領土的關心に於て、精力的に其の極點に達する。國家の機能は外敵の防禦と、內部秩序の維持に止らず、經濟的、學術的、藝術的その他百般の社會傳承に關する、國民の個人的及び團體的活動に對して、積極的に指導作用を爲る。國家と國民との右の如き全面的な

關係から、國家は屢々生成社會と考へられ、基礎的な群であると見做される。民族と國土とを、その成體要素とする點に於て、國家の性質が著しく生成群的であることは、首肯されねばならない。

それ故に國家に於ける集團意識が、內面的に他の構成群に於けるよりも强固であることは當然であり、群の統制は國家に於て最も充實した形相を示してゐる。個人が若し職業上關係してゐる一つの經濟團體から、いはば國家的なほど强力な壓力を加へられると假定すれば、その感情的不滿は立處に爆發して、積極的な團結意識は消滅して了ふであらう。また假りに一つのクラブが、家族と同程度の束縛力を、成員の行動上に有するとすれば、彼は到底その不自由に堪へず、その群よりの分離を志すに至るであらう。このやうな場合に、これに代る、もつと個人にとつて都合よき、構成群の選擇は比較的に容易である。然るに我等は國民として、また家族の一員として、多大の統制的壓力に堪へ、これを苦痛として意識的に反撥することは少い。これは國家、家族等の團體生活よりの分離が、運命的に殆んど我等に不可能であり、直接に個人及び種族の安全を危くするからである。しかし人性は一

面に於て、決して自己及び種族の目前の安全のみを希ふ固定的なものではなく、そのために統制に從ふ反面には、人格的自由の擴大のために、絶えず統制に逆つて、自己及び種族の冒險的な發展を企てやうとする流動性を有つてゐる。その意識的方向は、必然的に、選擇し得べき構成的社會群の、自律的生活樣式に向ふことになる。人は、此の兩種類の重疊し、交叉し、混合する社會群の間を、時代と共に彷徨する群居的な存在であると考へられる。

群は多數者の集團である以上、性質形式の如何を問はず、個人の協同活動の態度を調整する統制作用は、必然的に行はれる。群が向上的狀態にある時、卽ち生成群に於ては人口の增殖するに從つて、また構成群に於ては、合目的なる發展をなしつゝある時(概ね成員の增加に伴ひ)統制の必要も亦增大する。如何なる大さに於ても、社會群は、その內部に於ける、個人の一群の、生活條件及び活動が、不可避的に變差を有することに依つて、數多の競爭的群に分化し、また分裂する傾向がある。(註二)、まして大集團となれば、愈〻精巧なる組織を以つて、統制されなければ、統一體としての存在を持續し得ない。(註三) 群の統制原理と認められるものは、生成群に於て

は、主として內面的な道德原則であり、構成群に於ては、主として表面的な法律原則である。

統制は、部分の犧牲に於て、全體の調和を得るのを目的とする。社會群に於ては個人的恣意は、全體意志にまで合成することに依つて、自ら統制する。その手段として群は種々なる機關を制作する。或は種々なる構造物に、多數意志の支持に依る統制的實力を與へる。統制機關の、最も表現的な形式として、統治機構(政府)が擧げられる。群としては最も簡單なる內容を有する街頭群に於てさへ、個人の態度的節制、群の態樣の整頓等のために、全員の暗默の合意の上に基礎を有する、一種の政策が相對的な形式の下に實行されてゐる。家族殊に小家族の如き、最も本質的に平和なる生成社會に於ても、一種の政治的機構に依つて協同生活の統制が保たれてゐることは明かである。

群の統制形式の最も始原的なるものは、所謂社會不安と稱せられる、群の全體的不調和狀態の中に認められる、成員の集團的分化現象である。この現象はまた或る社會群の統制力が甚だしく衰退した時に、發生するものであるから、其の意味か

らすれば、一つの統制形態の終末的形式でもある。社會不安は、群成員がその生活の根據に就て、その活動の原則に就て、または共同目的の妥當性に就て等、種々なる關係に於て、集團意識內容に分裂を生じた結果、性格的に甚だしく不決斷となり、懷疑的となる場合に生ずる。漠然として據り處のない各成員間の心理的焦燥が、集合的に其のはけ口を求める時、期せずして『指導者に從ふ一致性』の分裂運動が行はれる。卽ち小數の指導群と多數の後續群とに分化する。所謂統制形式の原型と認られる現象である。此の二つの群は『我等の集團』的なる全體意識に依つて、共同目的への統一行動を通じて再結合せられる。此の際、兩群の間に支配關係を生ずるとすれば、それは多數者の側より見て、所謂權力の承認に基く承服關係である。

この形式に依る統制作用の實際が、群の全體活動を强化することに成功すれば、群は發展と共に內容的に新生化する一面に於て、成員の協同活動形式は絕へず固定されて、習慣、道德、法制、秩序其他無數の統制要素を形成する。統制形式の整備は、群の發展傾向を助長して、その資財的充實を容易ならしめ、その結果はまた必然的に統制權力の擴大となる。群の發展はまた、必然的に人口の增加を伴ふ。人口增

加は群の內部的事情からも、對外事情からも起る。そうして指導群(支配的)後續群(被支配的)の兩方面に於て、夫々一次的、二次的群、及び優位的、劣性的群等の分化作用を起す。從つて兩群の元の協調的な權力關係は必然的に變質し、客觀的條件の變化に應じて、小數者の威壓に依る抑壓關係と承服關係との、甚だ複雜な、甚だ等差の多い混成的關係となる。一方に於て、斯の如き狀態に至れば、社會傳承の種々なる統制的要素は、群の全員に對し、舊の如き一律的な、規範的勢力を維持することが出來ない。それ等は、必ず多少とも實體的な形式を有して、內容的に急速な變化を遂げ難い性質のものである。然るに群の成員の、個人的並びに集合的意識は、元來頗る流動的なものであり、多數者の意志、乃至輿論は環境事情の變遷に應じて、速かに變つて行くものである。かくして個人は其の態度に統一を失ひ勝ちとなり、群は全體として統制力の弱い部分、又は及ばぬ部分等を生ずる。此の狀態が或る程度まで進展すれば、群の全面的空氣の中に、社會不安の感情が瀰漫することゝなる。その次に生ずる、成員の個人的及び團體的な雜多な運動、卽ち改革的なるものと、その反作用的なるものとの雜多な運動も、單純化して考へれば、結局右に述べた統制

現象の循環的發展であると考へられる。

かう云ふ運動の起る時には、常に目的の實現に就て、小數の實行的分子と、多數の態度的支持者とが、群の內部に於て、分化し、再結合する。假りに行動群と支持群と名付ければ、支持群の人數が其の群の中に於て壓倒的に多數となれば、行動群の運動は成功する。何故ならば支配的威力卽ち統制權力は、結局社會意識卽ち群の集團意識の、重壓力の基礎の上に立つものでなければ、維持することが出來ないし、集團意識の重壓力は結局、小數意志對多數意志の比率の問題であり、その意志作用は全面的卽ち水平的であると同樣に、垂直的であるからである。指導群と後續群、行動群と支持群との人口的關係に於て、前者が常に比較的小數であり、後者が常に比較的多數であるのは、個人的能力及び條件の不可避的な差異に基く分化現象であると考へられるが、一面に於て此の關係は、最少の犧牲に於て、最大の効果を收めやうとする、自然の叡智に依る、生物群一般の運動傾向とも一致するやうに思はれる。また群の統制の見地から云つても、集團意識の重壓力の活動のための有効な形態であるやうに考へられる。フイアカントの言葉は、此の場合にも、適當するものと

思はれる。

「全體意識は監視者の全體意識たることを要するも、行爲者の意識たることを必要としない。」(註三)

(註一) Ellwood : Sociology in its Psychological Aspects. PP. 191.

(註二) Simmel : Soziologie S. 290

(註三) Vierkandt : Gesellschaftslehre S. 359 この譯語は小松堅太郎氏『社會學論考』P. 346. に依る